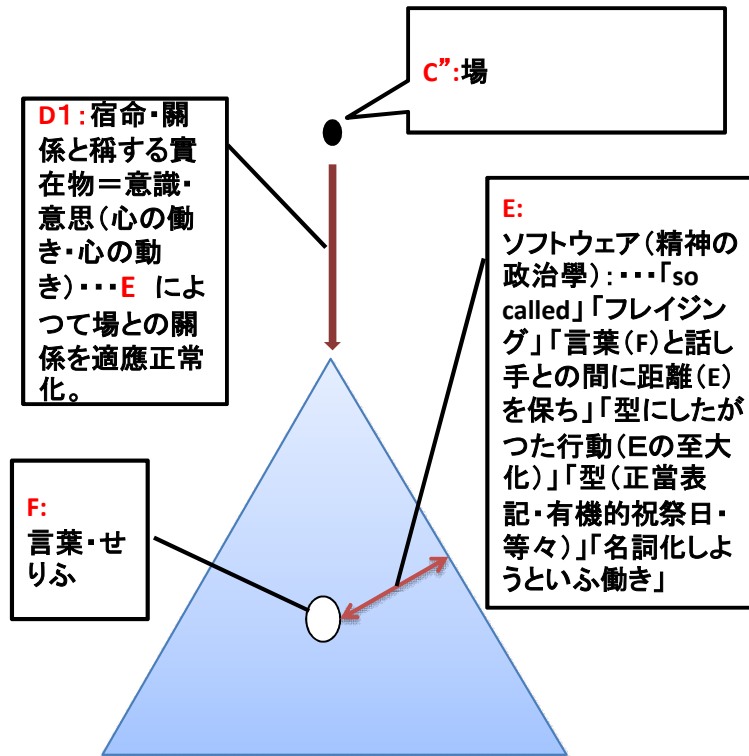


場(c")から生ずる、「関係(D1)と稱する實在物は潜在的には一つのせりふ(問答・對話・獨白:言葉)によつて表し得る」。故にその言葉との附合ひ方、扱ひ方(型・Eの形成=「型にしたがつた行動」)によつて、人間は場との関係の適應正常化が叶へられる」と言ふ事になる。



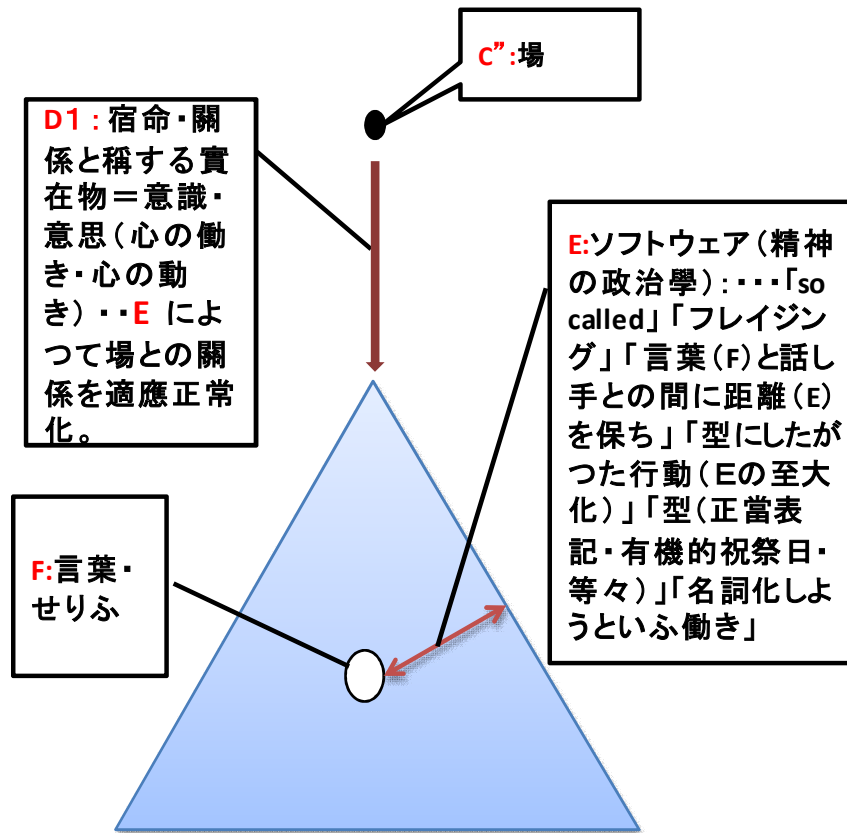
*「型にしたがつた行動(Eの至大化)は」、場との関係を適應正常化させてくれ(即ち必然感・全體感の獲得)、その結果として、生の充實感(實在感)を人間に齎してくれると言ふのである。つまり、型(正當表記・有機的祝祭日・等々)は、「歴史=時間的全體との関係」及び「自然=空間的全體との関係」を、即ち場との関係を、我々日本人に適應正常化させる能力を秘めてゐるのだと恆存は言ふのである(以下粹文参照)。

*「文化(D1)の根柢は言葉(F)にある事に氣附いてゐる人が餘りにも少ない。なぜにさうなつたかと言へば、戦後の國語國字改悪(型の喪失)が徹底した結果、言葉が文化を支へ、思考力(E: so called)や道徳(E: 型)や人格(FE: 型)を支へ、その崩壊を食ひ止め得る唯一の財産だといふ自覺の切掛けすら持たぬ人達が多くなつたからである」(『新漢語の問題』全七)

* 恆存は『醒めて踊れ』で、實證精神の範疇である、「So called」「フレイジング」「精神の政治学」をソフトウェア的手段と捉へてをり、「精神の近代化」(個人主義の確立)は、ソフトウェアの効果的發揮によつて、その結果として齎されるものと捉へてゐる。(参照: 拙文『醒めて踊れ』の下欄圖)

即ち、西歐(場)との関係(宿命)として齎された「近代化」への適應を、新漢語・外來語の用法(So called)で正常な關係に「形ある『物』として見せる」。それがハードウェアとしての近代化(資本主義化・民主主義化・個人主義化・機械化・組織化・合理化等々)に對するソフトウェア(精神の政治学)としての對處方法なのである。

場(c'')から生ずる、「関係(D1)」と稱する實在物は潜在的には一つのせりふ(問答・對話・獨白:言葉)によつて表し得る」。故にその言葉との附合ひ方、扱ひ方(型・Eの形成=「型にしたがつた行動」)によつて、人間は場との関係の適應正常化が叶へられる」と言ふ事になる。



②

- * 「言葉(F)は物を指し示す物の影(寫實)ではなく、「實在物=關係(D1)」を目に見える様に傳へる用途を持つてゐるものである」⇒チェーホフに關聯(前々頁)。
- * 言葉との附合ひ方である「so called=所謂何々=Eの至大化」「フレイジング=Eの至大化」の效果的用ゐ方で、「自分と言葉との距離の測定が出来」「言葉を自己所有化する事が出来る」。その働きによつて、結果的に場と言ふ對象から自分を分離(非沈湎化)させる事が可能となり、しいては「場との關係を適應正常化(D1の至大化)」させる事へと繋がる。
- * 「言葉(F)と話し手との間に距離(E)を保ち、その距離を絶え間なく変化させねばならぬのと同様に、相手と共に造り上げた場と自分との間(D1)にも距離を保たねばならず、その距離を絶えず変化させ得る能力がなければいけない。さういふ能力こそ、精神の政治学としての近代化といふものなのである」(『醒めて踊れ』)と。
- * 「自分と言葉(物)との距離の測定が出来るとは「言葉(物)を自己所有化する」と言ふ事。即ち、意識度を高くし、言葉(物)の用法に細心の注意をし、「言葉(物)を自分から遠く離す事によつて、逆にその言葉を精神化し、支配、操作する事が出来る様になる」(P391全七)。さうする事によつて「自分に近付け、言葉を物そのものから離して自分の所有にする事が可能になる」。
- * 「そもそも動作や作用、さらに人間の抽象的な營みを名詞化しようといふ働きそのものが、主體である自分を對象から分離し、距離をつくらうとする衝動なのです」(全三P204『日本および日本人』)

*